

# 備後国大田荘から高野山へ

——年貢輸送のイデオロギー——

小 山 靖 憲

はじめに

1. 今高野

2. 尾道倉敷

3. 紀伊湊

4. 高野政所

おわりに

## 論文要旨

備後国大田荘は関係史料が豊富なこともあって、膨大な研究史の蓄積があり、荘園史研究に多くの論点を提示してきた。しかしながら、備後国山間部の荘園の年貢がどのようにして、荘園領主のもとに運ばれたのかを具体的に跡づけた研究はない。そもそも、このような観点は従来の荘園史研究には希薄であって、荘園支配の問題を荘園内部の農業経営や村落等に限定し過ぎてきたのである。

そこで本稿は、備後国世羅郡から陸路で尾道に搬出され、ついで瀬戸内海を航行して紀伊湊に入り、さらに川舟に積み替えて紀ノ川を遡行し、高野山麓の政所に搬入される過程を復元的に考察しようとするものである。ただし、史料的な制約もあり、その全体像を明らかにすることは困難なので、年貢輸送の拠点となった場所とその施設を中心的にとりあげることにする。すなわち、大田荘の政所があったと推定される今高野、「船津之倉敷」がおかれた尾道、川舟への積み替えが行われた紀伊湊、年貢米を集積した山下の政所等である。

これら年貢輸送の拠点を個別的に検討してみると、今高野は鏡阿によって勧請された丹生・高野明神が中心にあり、尾道には港の灯籠堂の機能をもつ浄土寺があり、山下の政所は慈尊院と称する寺院であったように、宗教施設が大きな役割をはたしていることがわかるのである。すなわち、中世の年貢輸送は純粋な経済行為としては必ずしも現象せず、かなりのイデオロギー性を帯びていたのである。